

序 文

明治の黎明と共に創設された日本海軍は、我が国近代化の先驅をなし、日清、日露の両役に大勝を博し、第一次世界大戦後、世界第三位の海軍大国となりました。

日本海軍の急速な増強に伴い、海軍燃料界も又、日本国内最大の燃料需要家として、明治、大正、昭和の三代に亘り、燃料の生産、技術、政策等各般に亘り、指導的役割を果してまいりましたが、其の中枢的存在は、徳山海軍燃料廠でありました。

昭和十六年十二月、燃料部門から見た場合、全く理解に苦しむあの大東亜戦争に突入、我が軍の勇戦空しく、三年有余にして銚を納むるの已むなきに至りました。而して我が海軍は、創設以来僅かに八十年の短命を以て亡び、海軍燃料界も又、落日の海軍と、その運命を共にしました。

あれから四十有余年、爾来今日まで、日本海軍は、内外の歴史研究家の研究対象となり、戦史、教育、制度、人物等各方面に亘る、研究論文が発表されました。

このような中であって、今回、徳山大学総合経済研究所が前例の尠ない、燃料廠を中心とした『徳山海軍燃料廠史』という、優れた研究論文を編纂刊行されたことは、洵に意義深いものがあると存じます。

思うに、さきの大戦により日本海軍は消滅しましたが、永年に亘り培われた技術と精神は、あの終戦直後の混

乱を克服して、各方面に開花いたしました。

中でも海軍燃料界の数千の技術者達は、戦後の産業、行政、教育等、各方面に参画し、日本の再建並に興隆に計り知れない貢献をいたしました。

而して是等多くの技術者達の揺籃の地が徳山海軍燃料廠であることに思いを致すとき、旧海軍の一人として本史の編纂刊行に限りない感慨を禁じ得ません。

恐らく本史は今後戦史研究者の必読の書となるばかりでなく、産学協同に関する貴重な資料となるでありません。

此処に本史の研究編纂に当られました脇先生をはじめ関係諸先生方に対し衷心より深甚の敬意を表する次第であります。

昭和六十三年五月

木山正義